ファッション・調理系専門学校の生徒の進路選択
――ジェンダーの視点から――

眞　鍋　倫　子

1．問題の所在

近年，教育社会学において，学校教育と職業世界の接続が大きな問題となっている。特に学校教育において職業的意義を求める本田（2009）以来，教育の職業的レリバンスに関する研究の一つの流れとして，職業教育への注目が増してきている（片山　2016，伊藤　2017 など）。若年層，とくに学歴が低い層の学校から職業へのスムーズな移行を可能にするものとして，職業教育への期待が大きくなっていると考えることもできる。

これまでの学校教育から職業への移行にあたっては，高校や大学を卒業する者を中心的な対象としてきた。これらの研究では，主に普通科や文科系といった領域において，教育内容に職業的な意義が弱いことが指摘されている。その背景としては，濱口（2009）が指摘するように，日本においては，新規学卒一括採用という雇用慣行の下で，職種を限定せずにその企業のメンバーとして採用し，複数の職務を経験させていく人事慣行がある。そのため，これまで学校教育において，職業教育について積極的に研究がなされることは少なく，むしろ就職活動などの制度的連結の問題として語られてきたと考えられる。

職業教育への着目が少なかったとはいえ，日本には職業教育を行う機関

がないわけではない。これまで教育社会学の領域で，職業教育機関として中心的に取り上げられてきたのは，高等学校の専門学科（片山　2016）や，高等専門学校（吉本　2003）といった教育機関であった。

本稿では，これらの教育機関とはやや異なる職業教育機関として，専門学校（専修学校専門課程）を取り上げる。高校を卒業後の進路として，近年やや減少しているものの，20％近くが進学しており，大学とは異なる，職業的な知識や技能を身につける場として存在しているものである。

専門学校への着目も，近年少しずつではあるが進んでいる（濱中，西田，眞鍋，多喜，吉本など）。これらの研究もその多くは，（主に若年者の）キャリア形成にたいする効果や職業教育への移行に関わる問題関心を持っている。

他方で，職業世界は学校教育以上にジェンダー化された世界である。教育から職業への移行の研究においては，女性のほうが非正規雇用になりやすいといったジェンダーによる差異が指摘される。また，欧米においては，職業教育や訓練の機会のジェンダー差が，労働市場における性別職務分離と結びつき，賃金などの労働市場における条件の男女間格差に結びついていることが指摘される（Gundert & Meyer　2012，Fuller & Unwin 2013）。

日本において，学校型の職業教育を行う機関として専門学校（専修学校専門課程）がある。この専門学校については近年になるまで，あまり着目されてこなかった。また，近年みられる研究においては，主に職業への移行が中心的な問題意識となっている。本稿では，教育とジェンダー研究の流れを受けながら，専門学校における職業的社会化が，いかにジェンダーと結びついているのか，という点を中心に検討を行う。

2．先行研究と研究の課題

専門学校の研究には，大きく分けると 3 つの領域がある。1 つは専門学

校という進路を選択する高校生たちの特徴という点である。2 つ目は専門学校を卒業したのちにどのようなキャリアにつながっているのか，という研究群である。そして 3 つ目は専門学校で行われている教育活動そのものについての研究群である。これらの先行研究を，ジェンダーとの関わりで検討しておこう。

まず，専門学校という進路選択についての研究群では，1990 年代以降に専門学校進学者層が変化したことを指摘する長尾（2008）や，それを否定する多喜（2019）などがある。また，専門学校進学者は，多くの場合，家庭背景が大卒に比べて低いといった指摘もみられる（西田　2010）。出身高校においても通信制や定時制といった高校からの進学者の存在が指摘される（内田ら　2018）。また，西田（2010）は，専門学校への進学を希望する高校生の特徴として，「専門以外のことを学びたくない」という排他的な意識を読み取っている。

次に，専門学校を卒業してからのキャリアについての研究をみると，専門学校を卒業したことがキャリアに与える効果におけるジェンダーによる差が指摘されてきている。眞鍋（2011，2016）は，就業構造基本調査の結果から，女性の専門学校卒は就業率や正規雇用率，賃金等において高卒とは異なり，大卒に近くなっていることを指摘する。他方で男性ではこのような効果はみられず，専門学校卒業者は高卒とほぼ差がない。このように，専門学校の効果は女性に顕著であり，男性ではほとんどみられない。この傾向は個票を分析した多喜（2017）においても確認されており，濱中（2009）でも同様の指摘がなされている。濱中（2009）では，さらに，職業の自律性などの評価においても，特に資格系の専門学校を卒業した女性においては，高い評価をしていることを指摘している。

このように，専門学校卒業者のその後の職業キャリアにもたらす効果は，その多様性が指摘される専門学校の中で，女性のほうが特定の資格系の学

科に進学することも影響している（眞鍋　2020）。その場合，女性たちは，特定のキャリア意識を持った層が専門学校に進学することによるものなのか，それとも専門学校教育を通じてキャリア意識が形成されていくのか，といった点については十分に検討することができていない。

専門学校の内部過程については，吉本（2003）が，専門的知識や技術よりも「しつけ」の機能を有していることを指摘している。また，植上（2011）は，学校の中での教育が「人間形成」の側面を持つことを指摘しており，専門的な技術よりもむしろ人格形成やしつけの面が強いと指摘されている。しかし，この内部過程の研究においては，生徒のジェンダーによる経験の違いや，その学科が想定している職業とジェンダーの関わりなどは十分に検討されてきていない。

本稿では，専門学校の進学動機および内部過程について，専門学校生を対象としたアンケート調査を実施し，以下の点を明らかにすることを試みる。

1）　専門学校に進学する前の，キャリアに関する意識のジェンダー差の検討

2）　専門学校における教育活動とその生徒による経験のジェンダー差の検討

次章では，調査結果を確認していく。

3．調 査 結 果

3.1.　調査の概要

本論は専門学校の 1 年次生に対するオンラインを通じた調査の結果の一部である。調査時期は 2021 年 7 月であり，オンライン調査サービス Questant を用いて，各学校を通じて授業時間等に生徒をアンケートサイトに誘導して回答してもらった。

調査対象校については，分野および生徒のジェンダー構成比などを考慮しながら選定している。本稿で用いるのはそのうち執筆時点でクリーニングが終了している，東京都内のファッション系および調理系の 2 校である。

回答者数の内訳はファッション系 39（女子 31　男子 8），調理系 58（女子 23　男子 45）であった。ファッションおよび調理といった行為は，家庭生活との結びつきもあり，女性と結びついていると思われるが，実際にはファッションでは女性が多く，調理では男性が多い傾向がみられ，職業としてのファッションや調理はかならずしも女性性と結びついていないと思われる。

研究計画全体では，オンラインを通じた質問紙調査以外に，教員および生徒へのインタビューを実施しているが，今回は質問紙調査の結果に限定した報告を行う。

3.2. 調査の結果

3.2.1. 生徒の属性等

最初に，簡単に生徒の性別，家庭背景といった点について確認しておこう。

表 1 は，回答者の家庭環境（両親の学歴，働き方，経済的ゆとり）についてまとめたものである。男女差は有意なものではないため，全体での分布を示している。これをみると，両親とも学歴が低くなっている。

また，両親の働き方では，父親は常勤が 72.6%，自営・家族従業者が 22.1%と自営形相がやや多くみられる。母親は常勤が 30.4%と少なく，パート・アルバイトが 39.2%，自営・家族従業者が 12.7%となっている。

さらに，経済的なゆとりについてみると，15 歳時点では「ゆとりがある」「ややゆとりがある」を合わせて 77.6%と 4 分の 3 がゆとりがあると言えたが，現在をみると 61.7%と，現在のほうがゆとりがなく，「やや苦しい」「苦しい」を合わせると 4 割近くとなっている。この点が進路選択と関連

表１　生徒の家庭背景

学歴		中学校卒	高校卒	専門学校卒	短大卒	大卒	N
	父親	12.8％	40.7％	14.0％	5.8％	26.7％	86
	母親	6.7％	38.2％	22.5％	13.5％	19.1％	89

現在の働き方		常勤	パート・アルバイト	自営・家族従業者	その他	働いていなくて，仕事を探している	働いていなくて，仕事を探していない	N
	父親	72.6％	1.1％	22.1％	4.2％	0.0％	0.0％	95
	母親	30.4％	39.2％	12.7％	8.8％	2.0％	6.9％	102

経済的ゆとり		ゆとりがある	ややゆとりがある	やや苦しい	苦しい	N
	15 歳（中 3）時点	23.4％	54.2％	17.8％	4.7％	107
	現在	19.6％	42.1％	30.8％	7.5％	107

しているかについてはこのデータからは確認できないが，今後の課題にしたい。

次に，出身高校についても確認しておこう。出身高校の学科についてみると，普通科が 67.6％と最も多いが，専門学科やその他の学科が 3 割程度となっている。学科の構成にはあまり大きな特徴はないが，四年制大学へ

表２　出身高校と高校時代の成績

学　科		四大進学率		校内成績	
普通科	67.6％	0 ～ 3 割	28.6％	上	12.0％
商業科	1.9％	4 ～ 6 割	45.7％	中の人	17.6％
工業科	2.8％	7 ～ 8 割	19.0％	中の中	27.8％
家政科	4.6％	9 ～ 10 割	6.7％	中の下	25.9％
その他	23.1％			下	16.7％
N	108	N	105	N	108

の進学率をみると，最も多いのは「4 ～ 6 割」の 45.7%，それ以下の「0 ～ 3 割」が続いて多く 28.6%となっており，いわゆる「進路多様校」からの進学者が多いことがわかる。校内の成績をみても，「上」「中の上」を合わせて 29.6%，「中の中」が 27.8%，「中の下」「下」を合わせて 42.6%と下のほうに偏った分布となっている。このことは，専門学校への進学層が，いわゆる進路多様校出身者や成績下位層になっているという従来からの指摘と整合的である。

3.2.2. 専門学校への進路選択

では，ここからは，専門学校を高卒後の進路として選択してきたプロセスが，どのようなものであり，男女でそのプロセスに差があるのかについて検討していこう。

表 3 は，専門学校への進学を希望した時期である。女性では「高校入学前」と回答した者が 28.8%となっており，男性の 9.8%よりも多い。「高校 3 年」と回答した者は男性では 54.9%と過半数だが，女性は 38.5%と半数以下となっている。サンプル数の問題や，今回の調査対象が調理やファッションといった分野であることからも，一般化には慎重であるべきものの，女性のほうが専門学校に進学することを早い時期から決めていると考えることができる。

では，専門学校への進学については，どのような理由からなされているのだろうか。入学理由について尋ねた項目に対して，「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」から選択して回答してもらったものを，「あてはまる＋少しあてはまる」と「あまりあてはまらない＋あてはまらない」にリコードした結果が表 4 である。

表 4 をみると，専門学校を選択する理由自体にはそれほど大きな差はないと考えることができる。「専門的な内容を学びたかった」「資格や免許を

表 3　専門学校に進学を決めた時期

	高校入学前	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年	N
女性	28.8%	15.4%	17.3%	38.5%	52
男性	9.8%	13.7%	21.6%	54.9%	51
男女計	19.4%	14.6%	19.4%	46.6%	103

P=0.086

表 4　専門学校入学の理由（あてはまる＋ややあてはまるの割合）

	女性	男性	男女計	
1. 資格や免許を取得したかったから	79.6%	84.9%	82.2%	
2. 専門的な内容を学びたかったから	96.3%	88.7%	92.5%	
3. 就職しやすいから	59.3%	69.8%	64.5%	
4. 親に勧められたから	16.7%	24.5%	20.6%	
5. 自宅から通学できるから	63.0%	56.6%	59.8%	
6. ほかに進路がなかったから	31.5%	37.7%	34.6%	
7. 経済的負担が少なかったから	18.5%	18.9%	18.7%	
8. 学校の先生に勧められたから	18.5%	13.2%	15.9%	
9. 自分の学力にあっているから	59.3%	43.4%	51.4%	
10. 施設やキャンパスの雰囲気が良いから	90.7%	79.2%	85.0%	+
11. 親元を離れられるから	7.4%	13.2%	10.3%	
12. 知名度があるから	25.9%	34.0%	29.9%	
N	54	53	107	

*** ＜ 0.001　** ＜ 0.01　* ＜ 0.05　+ ＜ 0.1

取得したかった」といった項目を肯定する者は多く，西田（2009）が指摘しているように「専門」への志向性を読み取ることができる。また，統計的に有意ではないものの，「就職しやすいから」については男女でやや異なっており，男性のほうが資格や就職といった点を重視していた傾向がある。「学力」を挙げた者は，女性ではやや多いものの，全体の半数程度にとどまっており，学力による自己選抜の結果としての専門学校進学という

見方は，今回のデータからは，あまりあてはまらないと考えることもできる。

次節においてはこのような選択の結果として，男女の学校での経験に異なる部分があるのか，ということについて検討していく。

3.2.3. 専門学校での生活におけるジェンダー経験

専門学校での学修において，学校が生徒に発していると考えられるメッセージについて尋ねた。

まず，学校で重視されている価値観等について，尋ねた項目に対して「重視されていると思う」と「やや重視されていると思う」「あまり重視されていないと思う」「全く重視されていないと思う」の 4 項目での回答を，「重視されていると思う＋やや重視されていると思う」と回答した者を足し合わせた結果が表 5 である。

表 5 をみると，ほぼすべての項目について「重視されていると思う」と「ややそう思う」の合計が 8 割から 9 割以上となっている。また，男女差もそれほど大きくなく，ほとんどが有意な差ではない。「資格を取得すること」が重視されていると考える割合が，男性のほうがやや低い点は，男性の意識との関連に注意が必要かもしれない。

この結果から，吉本（2003）が指摘するように，専門学校で行われている教育活動には，礼儀正しさや時間を守るといった「しつけ」機能も含まれていることがわかる。しかし，今回の結果からはこの「しつけ」は技術を身につけることよりも強調されているとは言えず，「知識や技術を身につけること」を前提にしながら，しつけ的な機能も果たしていると考えることができるのではないかと思われる。

このようなメッセージを受けている学校生活への適応についても確認しておこう。これまでに分析してきた項目とはやや異なり，学校生活への評

表 5　学校で重視されていること（重視されていると思う＋やや重視されていると思うの割合）

	女性	男性	男女計	
1. 職業に関わる知識を身につけること	98.1%	92.5%	95.3%	
2. 職業に関わる技能を身につけること	100.0%	94.3%	97.2%	+
3. 礼儀正しさ	90.7%	94.3%	92.5%	
4. 時間を守ること	100.0%	96.2%	98.1%	
5. 授業をきちんと真面目に受けること	94.4%	86.8%	90.7%	
6. 勉強に取り組む姿勢	92.6%	86.8%	91.4%	
7. 資格を取得すること	90.7%	75.5%	83.2%	*
8. 希望している職業に就くこと／就けること	90.7%	92.5%	91.6%	
9. 先生と積極的にコミュニケーションを取ること	87.0%	84.9%	86.0%	
10. 卒業後の進路について先生と相談すること	92.6%	88.7%	90.7%	
N	54	53	107	

*** ＜ 0.001　** ＜ 0.01　* ＜ 0.05　+ ＜ 0.1

価については男性と女性で回答の傾向に有意差がある（表 6）。

「専門学校での学びが充実している」に対して，「とてもあてはまる」または「あてはまる」と回答した者は，女性では 96.3%だが，男性では 86.5

表 6　学校生活について（とてもあてはまる＋あてはまるの割合）

	女性	男性	男女計	
1. 専門学校での学びは充実している	96.3%	86.5%	91.5%	*
2. 専門学校での学びを通じて自分は成長している	94.4%	86.5%	90.6%	
3. 授業についていけないと感じる	35.2%	42.3%	38.7%	
4. 授業に興味・関心が持てない	5.6%	34.6%	19.8%	***
5. 専門学校をやめて就職を考えたことがある	9.3%	25.0%	17.0%	*
6. 専門学校をやめて大学への進学を考えたことがある	5.6%	32.7%	18.9%	***
7. 同じ学校の他の専門分野やコースに移ることを考えたことがある	5.6%	28.8%	17.0%	**
N	54	52	106	

*** ＜ 0.001　** ＜ 0.01　* ＜ 0.05　+ ＜ 0.1

%と女性のほうが高く評価している。「自分は成長している」についても，統計的に有意ではないものの，男性のほうが低いという，同様の傾向がみられる。

また「授業に興味・関心が持てない」についても女性では「とてもあてはまる」または「あてはまる」を選択した者は5.6%と少ないが，男性では34.6%とかなり多い。「授業についていけない」と感じる者は，女性35.2%，男性42.3%と男性のほうが多いが，有意な差ではない。

進路変更についても，就職への進路変更を考えたことがあるのは女性で9.3%に対して男性は25.0%，大学への進路変更を考えたことがあるのは女性で5.6%に対して男性32.7%，同じ専門学校内での他の分野やコースについては女性5.6%に対して男性は28.8%となっている。男性の3～4割が，進学してきた専門学校での学びに興味が持てず，進路変更を考える層であるということができよう。女性については，学校生活への適応はかなりよいと考えられる。

では次に，これらの学校経験を通じて，そこで学んでいる職業と自身との関係がどのように変化したのかをみていこう（表7）。

現在学んでいる職業で働きたい，という意識は，全体としては「変わらない」が16.8%と少なく，「弱くなった」者が44.9%，「強くなった」者が38.3%と，弱まる傾向にある。ただし，有意ではないものの，女性で「強くなった」者のほうが多く，男性では「弱くなった」者のほうが多い。入

表7　今学んでいる職業で働きたいと思う気持ちの変化

	弱くなった	変わらない	強くなった	N
女性	38.9%	14.8%	46.3%	54
男性	50.9%	18.9%	30.2%	53
男女計	44.9%	16.8%	38.3%	107

P=0.359

学してから数か月での学習を通じて職業への意欲は強まるか弱まるかに二分されるが，女性では強まる傾向があり，男性では弱まる傾向があることから，学校教育の経験において，何らかの違いがあると考えられる。

より詳細に職業への意識をみると，男女ともに，その職業が自分に合っているかについては9割弱が「あっている」と回答しており，また，同程度が今学んでいる職業に「就きたい」と回答したものの割合も9割近くとなっている。後者については，男性で肯定的回答が少ない傾向にあるが，統計的には有意な差ではない。先にみたのは変化であり，こちらでみているのは現状の希望であるので，男性の場合，より強い希望が弱まった，という解釈も可能であるが，現時点ではこの2つの回答傾向への解釈は難しい。

他方でこの表8からは，「将来的に働いていける自信がある」については，有意ではないものの，男性のほうが「そう思う」「ややそう思う」と回答する傾向があり，その仕事を続けたいか，ということと続ける自信があるかについて男女で傾向がやや異なる。一般的に女性のほうが職業を継続するのが難しいことから，このような結果になったと考えることもできるが，今後，より詳細に検討することが必要であろう。

表8　学んでいる職業について

	女性	男性	男女計
1. その職業に自分がどのくらい合っていると感じていますか（とてもあっている＋あっている）	87.0%	84.9%	86.0%
2. 卒業後に今学んでいる職業に就きたいと思っていますか（とても就きたい＋就きたい）	94.4%	83.0%	88.8%
3. 今学んでいる職業で卒業後5年たっても働いていると思いますか（そう思う＋ややそう思う）	92.6%	86.8%	89.7%
4. 今学んでいる職業で，将来的に働いていける自信がある（そう思う＋ややそう思う）	77.8%	83.0%	80.4%
N	54	53	107

*** ＜ 0.001　** ＜ 0.01　* ＜ 0.05　+ ＜ 0.1

表 9　進路選択を振り返っての評価

	女性	男性	男女計	
現在の分野に進んでよかったと思いますか	94.4%	81.1%	87.9%	*
今の学校に入学してよかったと思いますか	96.3%	86.8%	91.6%	+
四年制の大学に本当は進学したかったと思いますか	22.6%	41.5%	32.1%	*
N	54	53	107	

*** ＜ 0.001　** ＜ 0.01　* ＜ 0.05　+ ＜ 0.10

最後に，進路選択への現時点での評価として，分野選択，学校選択および四年制大学に行きたかったか，といったことを尋ねた（表9）。「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 4 件を「そう思う＋ややそう思う」と「あまりそう思わない＋そう思わない」にリコードした結果を示している。分野の選択に関しては，女性の 94.4%が「そう思う」「ややそう思う」と回答しているが，男性では 81.1%であり，男性はやや否定的に評価していることがわかる。同様に，「今の学校に進学してよかったと思いますか」という問いに対しても，「そう思う」または「ややそう思う」と回答していたのは女性では 96.3%であったのに対して，男性では 86.8%となっており，男性のほうが否定的な評価をする傾向がみられる。このように，自身の進路選択に対して，女性のほうが進学後も肯定的に，男性のほうがやや否定的に捉えていることがわかる。

ここまでから，女性のほうがより専門学校に進学したことを肯定的に捉え続けているが，男性では学校への適応にやや難があり，進路変更を考えている層が一定程度いることがわかる。男性の場合でも，進路変更を考えている場合，かならずしも大学を考えているわけではない。

服飾や調理といった分野に限定される可能性もあるが，これらの職業に向けた教育を受けていく中で，その分野への興味・関心が持てなくなり，実際にその職業に就くことよりも他の進路を検討するのは男性のほうであった。女性のほうが，比較的授業にも適応し，その職に就く意欲を高めて

いっていることがわかる。今後，より授業の受け止め等について尋ねていくことで，このような職業への意識の変化の形成プロセスを明らかにする必要があろう。

3.2.4. 進路展望とジェンダー

最後に，専門学校 1 年次の時点での進路希望がどのようなものか，確認しておこう。

表 10 は，卒業後の働き方の希望について尋ねた者への回答である。

表 10 をみると，女性では「正社員として働きたい」が 85.2％となっているが，男性では 58.5％とかなり少なくなっている。他方で「わからない」と回答した者が，女性では 7.4％であるが男性では 30.2％とかなり多い。入学から間もない時点で，働き方について，男性のほうが未定層が多いことがわかる。

また，将来イメージとして，同じ項目について，「将来やりたいか」という自身の志向性と「将来ありうると思う」という実現可能性についても尋ねた結果が表 11 である。また，志向性を肯定する割合から実現可能性を肯定する割合を引いた値を算出した。

生徒たちが「かならずしたい」と「できればしたい」と回答した項目は，「好きなことを生かした仕事をする」「お金持ちになる」「同僚とうまくや

表 10　専門学校卒業後の進路希望

	1. 正社員として働きたい	2. 進学したい	3. 進学も就職もしたくない	4. わからない	5. その他	
女性	85.2％	1.9％	0.0％	7.4％	5.6％	54
男性	58.5％	0.0％	1.9％	30.2％	9.4％	53
男女計	72.0％	0.9％	0.9％	18.7％	7.5％	107

P=0.013

っていく」「納得のいく仕事をする」「常に新しい技術や知識を身につけていく」，「知識や技術では誰にもひけをとらないようにする」「ひとなみ以上に出世する」「同期入社の人より早く出世する」といった項目であった。しかし，その実現可能性への回答をみると「お金持ちになる」「同期入社の人より早く出世する」「ひとなみ以上に出世する」といった項目についての実現可能性は低く見積もられており，「そうなりたいけどできるとは思わない」項目になっている。

一方で「好きなことをいかした仕事をする」「納得のいく仕事をする」「常に新しい技術や知識を身につけていく」「同僚とうまくやっていく」といった項目は，実現可能性もかなり高く見積もられており，「そうなりたいし，できると思う」と考えられている項目である。

男女差に着目すると，男性のほうが将来やりたいと考えている項目は「有名な会社に入る」「独立・起業・開業する」「稼ぎ手として家族を養う」「就職後，再び学校で学ぶ」といった項目であり，女性のほうが将来やりたいと考えている項目は「ずっと働き続ける」であった。

また，実現可能性（将来あり得る）について，男性のほうが「有名な会社に入る」「お金持ちになる」「同期入社の人より早く出世する」「ひとなみ以上に出世する」「稼ぎ手として家族を養う」「就職後，再び学校で学ぶ」といった項目で「あり得る」と考える者が多かった。特に，「ひとなみ以上に出世する」「お金持ちになる」といった，全体的にみて希望するが実現可能性は低い項目において，男性のほうが楽観的であるとみることができる。また，知識を身につける方法として「学校」を選択している傾向が男性のほうが多いのは，学歴が重視されると考えていたり，大学等に進学することを重視する傾向と併せて注目に値する。

女性のほうが高い項目としては，「自分の納得のいく仕事をする」と「専業主婦になる」等である。有意ではないものの，「自分で納得のいく仕事

表 11　将来やりたいこととあり得ること

（%）

	将来やりたい(A)				将来あり得る(B)				(A)−(B)		
	女性	男性	男女計		女性	男性	男女計		女性	男性	男女計
1. 有名な会社に入る	64.8	80.8	72.6	+	33.3	48.1	40.6	+	31.5	32.7	32.1
2. 好きなことをいかした仕事をする	98.1	98.1	98.1		96.3	92.3	94.3		1.9	5.8	3.8
3. お金持ちになる	94.4	92.3	93.4		25.9	40.4	33.0	+	68.5	51.9	60.4
4. 職場の同僚とうまくやっていく	100.0	98.1	99.1		83.3	86.5	84.9		16.7	11.5	14.2
5. 自分で納得のいく仕事をする	98.1	98.1	98.1		92.6	78.8	85.8	*	5.6	19.2	12.3
6. 同期入社の人より早く出世する	88.9	86.5	87.7		22.2	46.2	34.0	**	66.7	40.4	53.8
7. 常に新しい技術や知識を身につけていく	100.0	98.1	99.1		85.2	76.9	81.1		14.8	21.2	17.9
8. はじめにはいった店や会社を,ずっと続けたい	72.2	61.5	67.0		64.8	57.7	61.3		7.4	3.8	5.7
9. 知識や技術では誰にもひけをとらないようになりたい	96.3	92.3	94.3		59.3	50.0	54.7		37.0	42.3	39.6
10. ひとなみ以上に出世する	87.0	94.2	90.6		29.6	51.9	40.6	*	57.4	42.3	50.0
11. 結婚する	70.4	78.8	74.5		68.5	65.4	67.0		1.9	13.5	7.5
12. 子どもを持つ	68.5	73.1	70.8		64.8	63.5	64.2		3.7	9.6	6.6
13. 独立・起業・開業する	55.6	71.2	63.2	+	35.2	53.8	44.3	*	20.4	17.3	18.9
14. ずっと働き続ける	79.6	65.4	72.6	+	74.1	76.9	75.5		5.6	-11.5	-2.8
15. 転職する	35.2	42.3	38.7		44.4	40.4	42.5		-9.3	1.9	-3.8
16. 専業主婦(主夫)になる or 配偶者に扶	37.0	26.9	32.1		40.7	19.2	30.2	*	-3.7	7.7	1.9
17. 稼ぎ手として家族を養う	48.1	86.5	67.0	***	40.7	80.8	60.4	***	7.4	5.8	6.6
18. 就職後，再び学校で学ぶ	1.9	17.3	9.4	**	0.0	19.2	9.4	**	1.9	-1.9	0.0
N	54	52	106		54	52	106		54	52	106

*** ＜ 0.001　** ＜ 0.01　* ＜ 0.05　+ ＜ 0.1

をする」や「常に新しい技術や知識を身につけていく」「知識や技術では誰にもひけを取らないようになる」も女性のほうが肯定する傾向があり，女性のほうが，自身の持つ知識・技能を重視し，またその実現可能性を高く見積もっていると考えられる。

4．ま　と　め

ここまでの調査結果の分析から明らかになったことを確認しておこう。

まず，女性のほうが，高校入学以前や高校でも低学年の時点から専門学校を希望する者が多いこと。男性は高校 3 年次に決めたと回答する者が多く，女性と比べると進路選択が遅い傾向がある。このことは，大学との関係を持つと考えらえる。男性のほうが大学進学を期待されているからこそ，専門学校に「切り替える」という選択を行いがちである可能性が考えられる。専門学校進学の理由については，それほど大きな男女差はないが，女性のほうが好きなことや専門性を身につけようという志向性が強い傾向がみられた。

専門学校に入学後の学校適応は女性のほうがよく，男性は進路変更を考える（実際に変更するわけではない）者が多い。進路の変更先は，大学がやや多いとはいえ，就職や他の専門学校へと回答する者も多い。これらも，ファッションや調理といった分野の特性の可能性も考えられる。また，その職業に就くことへの意欲は女子では増大する傾向があるが，男子ではむしろ減退する者も多い。授業への興味が持てないといった回答をする者も多く，専門学校での専門的な学習をすることについて，評価が揺れていると考えることができる。

このような傾向が，ファッションや調理といった比較的女子向きとされるような分野に進学してくる男子であるからこそ起こるのであれば，それは，いったいどのようなメカニズムなのか。進路選択の時点での間違いな

のか，一定程度興味を持ってはいったにもかかわらず授業に興味が持てなくなるのはなぜなのか，といった点から検討する必要がある。こういった点については，現在および今後行うインタビュー調査によってより明らかにすることができるだろう。また，今後，他の分野の専門学校の調査も行う予定であるが，その中で，これが女性的な領域とされる分野における男子生徒の問題であるのか，別の問題であるのかといった問いにもこたえることができるであろう。この点は今後の課題としたい。

付記　本論文は科学研究費補助金　基盤（c）　課題番号　20K02595「職業教育機関としての専門学校教育とジェンダーに関する実証的研究（研究代表：眞鍋倫子）」の成果の一部である。

参考・引用文献

Fuller, A. & Unwin, L. 2013 “Gender Segregation, Apprenticeship and the Raising of the Participation Age in England” *LLAKES Research papers 44.*

Gundert, S. & K.U. Meyer 2012 “Gender Segregation in Training and Social Mobility of Women in West Germany”, *European Sociological Review* 28（1）, 59–81.

濱中淳子　2009「専修学校卒業者の就業実態　職業教育に期待できる効果の範囲を探る―」『日本労働研究雑誌』No.588. 34–43.

濱口桂一郎　2009『新しい労働社会』岩波新書.

本田由紀　2009『教育の職業的意義』ちくま新書.

伊藤秀樹　2017『高等専修学校における適応と進路―後期中等教育のセーフティネット』東信堂.

片山悠樹　2016『「ものづくり」と職業教育―工業高校と仕事のつながりかた』岩波書店.

眞鍋倫子　2011「専門学校卒業の効果」『教育学論集』60：83–98.

――― 2016「女性のキャリアに対する専門学校卒業の効果：就労構造基本調査の分析より」『教育学論集』58：55–75.

――― 2020「専門学校教育とジェンダー：「学校基本調査」の分析から」『教育学論集』62：83–110.

長尾由希子　2008「専修学校の位置づけと進学者層の変化」『教育社会学研究』83：85–104.

中村高康・平沢和司・荒牧草平・中澤渉編『教育と社会階層―全国調査から見た学歴・学校・格差』ミネルヴァ書房．37–86.

西田亜希子　2010「専門学校は大学進学の代替進路か」中村高康編『進路選択の過程と構造−高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房　141−162.
小方直幸（編）　2009『専門学校教育と卒業生のキャリア』広島大学高等教育研究開発センター.
多喜弘文　2017「学歴としての専門学校の効果とその男女差：就業構造基本調査の個票データを用いた基礎分析」『社会志林』63（3）. 59−78.
———　2019「男女における専門学校進学の意味—進学分野と時代変化に着目して」
塚原修一　2005「専門学校の新たな展開と役割」『日本労働研究雑誌』47（9）：70−80.
内田康弘・片山悠樹・都島梨紗・尾川満宏　2018「専門学校への進学と将来展望—専門学校から職業への移行研究の基礎分析」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』3：19−28.
植上一希　2011『専門学校の教育とキャリア形成—進学・学び・卒業後』大月書店.
吉本圭一　2003「専門学校の発展と高等教育の多様化」『高等教育研究』6：83−103.